

## 実施報告

## 2022 年度徳島大学全学 FD 推進プログラムの実施報告

齊藤隆仁<sup>1)</sup>・吉田 博<sup>2)</sup>・塩川奈々美<sup>2)</sup>・飯尾 健<sup>2)</sup><sup>1)</sup> 徳島大学教養教育院 <sup>2)</sup> 徳島大学高等教育研究センター

要約：徳島大学では、2002 年度から全学 FD 推進プログラムを通じて、FD の体系化、組織化、日常化を推進してきた。2022 年度も 2020, 2021 年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、ほとんどのプログラムがオンラインでの実施となったが、新たな連携や対面で実施したプログラムもあった。オンラインツールを活用した双方向 FD 「授業について考えるランチセミナー」では、高知大学と共同で FD プログラムの開発・運営を行った。「大学教育カンファレンス in 徳島」はオンラインでの実施に加え、一部対面会場を設置したことで、参加者同士の情報交換の機会を作ることができた。また、「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」は 5 年ぶりに対面で開催することができた。本年度実施した各プログラムの概要を記載し、アンケート結果等から窺える成果と今後の課題について考察する。

(キーワード: 教育の質保証, 教育力開発コース, 授業について考えるランチセミナー, オンライン研修)

## 2022 Annual Report on Faculty Development Programs at Tokushima University

Takahito SAITO<sup>1)</sup> Hiroshi YOSHIDA<sup>2)</sup> Nanami SHIOKAWA<sup>2)</sup> Ken IIO<sup>2)</sup><sup>1)</sup> Institute of Liberal arts and Sciences, Tokushima University<sup>2)</sup> Research Center for Higher Education, Tokushima University

Abstract: Tokushima University has been promoting the systematization, organization, and routinization of faculty development (FD) through the university-wide FD promotion program since FY2002. In FY2022, most of the programs were conducted online due to the novel coronavirus (COVID-19) pandemic, as in FY2020, 2021. However, some programs were implemented in new partnerships or face-to-face. The online interactive FD seminar "Lunch Seminar on Thinking about Classes" was developed and managed jointly with Kochi University. Moreover "University Education Conference" was held online, and some face-to-face venues were set up, so that we could create opportunities for participants to exchange information with each other. In addition, the "Teaching Portfolio Workshop" was held for the first time in five years. An overview of each program conducted this year and discussions about challenges for the future based on the results of the questionnaire are described.

(Keywords: quality of education, Educational Development Course, Lunch Seminar on Thinking about Classes, online training)

## 1. はじめに

2022 年度は、2020 年からの新型コロナウイルス感染症は終息してはいないものの、ある程度対面授業も可能となり、オンライン授業をどのように活用していったらよいかを考えて実施することが可能な年となった。2022 年 10 月に実施した第 5 回教員の教育に対する意識調査（ティーチングライブ）においては、オンライン授業を有効に活用しているという意見がある一方で、学生とのコミュニケーションがとりづらい、教育効果があが

らないという声も数多い。未曾有の事態であるからこそ、個人の体験のみから教育改善を行うのではなく FD という場で効果的な教育改善についての情報を共有することが重要である。

2022 年には大学設置基準が改正され、授業方法別に基準を定めた規定が廃止される、教育課程等に係る特例措置が設けられるなど、各学部・学科・コース等の教育プログラムを見直す際の前提条件が従来から大きく変化している。現在実施している教育プログラムも含め、その質保証におい

ても全学 FD 推進プログラムに期待されるところが大きい。

以下、今年度の各 FD の具体的内容とその成果を述べる。(齊藤隆仁)

## 2. 教育改革に関する勉強会・意見交換

徳島大学の教育改革を遂行するために、徳島大学教育担当理事と全学 FD 推進プログラムの実施を支援する高等教育研究センター教育改革推進部門は、大学教育改革の動向及び徳島大学の現状について、意見交換を行い、具体的な教育改革の取り組みについて提案・検討を行っている。本 FD はマクロレベルの FD (教育改革 FD) として位置づけており、教学マネジメントを支える基盤としての役割も期待されている。2022 年度は、本学が今年度からの実施する、教学アンケートの取り組み、アフターコロナ、ウィズコロナを見据えた徳島大学の今後の教育改革を主なテーマとして議論、意見交換を行った (表 1)。

2020 年度より議論を進めてきた教学アンケートの改革 (アンケートの統合、質問項目の見直しや統廃合、実施体制の見直し等) について、2021 年度に新しい実施に向けた体制等の準備を整え、2022 年度から実施している。本取り組みでは、新たに全学統一の設問を設けることで、学部間の比較を可能とし、高等教育研究センター教育の質保証支援室等が、現状分析及び今後の教育改革のために結果を活用できる仕組みを整えるものである。今年度は、実施一年目にあたるため、円滑なアンケートの実施及び結果の集約を進めることが重要課題である。今後は、デザイン型 AI 教育研

究センターと連携し、収集したデータの分析、教育改革・改善に関する提案を検討していく予定である。

また、アフターコロナ、ウィズコロナを見据えた今後の教育改革については、教育担当理事と現状の背景や問題意識を共有し、教育改革の 3 つの方針と 7 つの戦略を検討してきた。今後は取り組む内容について具体的に検討していく予定である。

教育改革 FD を通して、教育改革推進部門では、高等教育開発の専門的立場から、本学が取り組むべき教育改革を支援するとともに、教育の内部質保証を推進している。近年の大学教育においては、教学マネジメントの確立が強く求められており、教学 IR を機能させるための取り組みも必要であり、またアフターコロナを見据えた教育の在り方を検討することも重要である。

引き続き全学 FD 推進プログラムは本学の教育改革、教育の内部質保証に関わる取り組みを通じて、学習者本位の大学教育を実現することに貢献することが期待されている。(吉田 博)

## 3. 教育の質保証 FD

### 3.1 目的・背景

徳島大学では 2018 年度に「徳島大学における教育の内部質保証に関する方針」等が定められ、学部等ごとに「教育プログラム評価委員会」が設置された。各教育プログラム評価委員会では、「プログラム評価・改善実施手順」を定め、教育プログラムの評価・改善を進めるうえでの体制整備が行われた。2020 年 1 月 22 日に中央教育審議会大学分科会より示された「教学マネジメント指針」においても、教育プログラム評価・改善をエビデンスに基づき、実質的に実施していくことが強く求められており、徳島大学でも実態を把握し、全学的な支援及び情報提供、組織間の連携等を進めることが必要であると言える。2020 年度には、各学部等のプログラム評価委員会を対象に、教育プログラムの評価・改善に関する課題やニーズを把握するための調査を実施した。その結果、プログラム評価の意義や必要性に関する理解を共有すること、技能領域や態度領域も含めて客観的に評

表 1 教育改革に関する勉強会・意見交換

回	実施日	内容
1	4 月 26 日	・全学 FD 推進プログラム ・教学アンケートの改革について ・徳島大学における教育改革
2	6 月 17 日	・徳島大学における教育改革
3	8 月 18 日	・授業設計ワークショップの概要
4	2 月 21 日	・ナンバリングの活用

場所：教育担当理事室 (本部棟 3 階)

価するための具体的な方法とエビデンスを整理することが、多くの学部学科等で必要であることが明らかになった。

これらの背景のもと、各学部等の教育プログラムの評価・改善について、客観的な指標に基づいた透明性のある評価、改善の計画を作成することを目的とした教育の質保証 FD を計画した。2022 年度は、2021 年度より継続的に実施している歯学部において、担当者と打ち合わせを行い、教務委員やプログラム評価委員を対象としたワークショップを実施した。

### 3.2 概要

教育の質保証 FD の具体的な内容は、高等教育研究センター教育改革推進部門教員と学部等の教育プログラム評価に関わる担当者が、プログラム評価の取り組みを確認し、当該学部等が目指す取り組みの実現に向けて課題や対応策等を検討する。打ち合わせを重ねながら、部門スタッフが必要な情報を提供し、当該学部等の文脈に合わせた実現可能な評価・改善計画を作成するものである。

#### 3.2.1 歯学部

##### ■打ち合わせ

2022 年 5 月 27 日 (金)  
 2022 年 6 月 17 日 (金)  
 2022 年 8 月 8 日 (月)  
 2022 年 11 月 7 日 (月)  
 2023 年 2 月 22 日 (水)

##### ■場所

歯学部第 1 会議室

##### ■参加者

日野出大輔教授、河野文昭教授、数藤愛子係員  
 2021 年度は、教育プログラム評価について、その意義や具体的な方法を共有し、歯学部で実施している教育プログラム評価の実施状況や課題について意見交換を行った。また、教育プログラム評価を行う上で重要な指標の 1 つとなる学生の学習成果を可視化・測定するためのアセスメント計画「カリキュラムアセスメントチェックリスト(以下、CACL)」の作成を行っている。2022 年度は、作成した CACL を使って学生の学習到達度を測

定するための課題や具体的な取り組みを検討した。歯学科では、①初学者・教養、②基礎歯学、③臨床の 3 つのレベルでコンピテンス・コンピテンシーの 7 項目について、口腔保健学科では、①初学者・教養・基礎、②臨床の 2 つのレベルでディプロマ・ポリシーの 6 項目 (一部統合している) について、学生の学習到達度を測定することとした。また、評価基準と評価資料を具体的にするために、歯学部 FD プログラムとして「歯学部教育プログラム評価のためのワークショップ」を開催し (図 1)、マイルストーンルーブリックを作成した (表 2)。

##### ◆歯学部教育プログラム評価のためのワークショップ

##### ■開催日時

第 1 回 2022 年 9 月 29 日 (木) 16:30-18:30  
 第 2 回 2022 年 12 月 9 日 (金) 17:00-18:30

##### ■会場

第 1 回 歯学部講堂  
 第 2 回 歯学部 101 講義室

##### ■参加者

歯学部 教務委員会委員、プログラム評価委員会委員、FD 委員会委員

### 3.3 成果と課題

2021 年度に引き続き、教育プログラムの評価に関する取り組みを継続して実施することができ、評価の試行に向けてより具体的な準備を進めることができた。特に、マイルストーンルーブリックの作成過程において、歯学部の教務委員会委員、プログラム評価委員会委員、FD 委員会委員が集まり、ワークショップを通して、教育プログラム評価に対して意見交換を行いながら作業を進めたことで、歯学部における教育プログラムの現状や課題に対する共通認識を持つことができた。学習の到達目標であるコンピテンス・コンピテンシーやディプロマ・ポリシーについて、評価するための資料がない項目や、資料があったとしてもレポート等の課題設定が十分ではない項目なども明らかになった。これは、教育プログラムの改善につなげていくためには極めて重要なことである。現状をできているように見せるのではなく、関係



図 1 歯学部・大学院口腔科学研究科教育プログラム評価のためのワークショップの様子

表 2 マイルストーンルーブリック (口腔保健学科 DP3-1, 3-2)

レベル	達成項目	評価の資料・基準・時期
1 初学者 (AP + α)	<input type="checkbox"/> 大学生に求められる倫理観・責任感の必要性を理解している (SIH 道場, 入学時オリエンテーション) <input type="checkbox"/> 周囲の人に対して, 利他的・誠実・正直な行動の必要性を理解している (担任による面談)	<input type="checkbox"/> 蔵本地区 / チーム医療入門の課題レポート・評点平均 80% 以上・1 年前期末 <input type="checkbox"/> 担任による面談 (周囲に対する利他的・誠実・正直な行動の必要性・理解の有無)・理解できている者 : 8 割以上・1 年後期末
2 教養 / 基礎	<input type="checkbox"/> 歯科衛生士法および関連法規・規範の内容を理解している (衛生行政) <input type="checkbox"/> チームにおける歯科衛生士の役割を知っている (関連科目) <input type="checkbox"/> 大学生としての倫理観・責任感をもつ (医療倫理学) <input type="checkbox"/> 周囲の人に対して, 利他的・誠実・正直な行動ができる (相談援助演習) <input type="checkbox"/> 他者の尊厳を尊重できる (相談援助演習)	<input type="checkbox"/> 衛生行政・GPC2.5 以上・1 年前期末 <input type="checkbox"/> チーム歯科医療学, 歯科診療補助論, 歯科保健指導論, 口腔疾患予防学・各科目 GPC2.5 以上・3 年前期末 <input type="checkbox"/> 医療倫理学・GPC2.5 以上・3 年後期末 <input type="checkbox"/> 相談援助演習・GPC2.5 以上・3 年後期末
3 臨床	<input type="checkbox"/> 歯学生としての倫理観・責任感をもつ (臨床・臨地実習) <input type="checkbox"/> 歯学生として, 利他的・誠実・正直な行動ができる (臨床・臨地実習) <input type="checkbox"/> 患者中心の医療を理解している (臨床・臨地実習) <input type="checkbox"/> 歯科衛生士法および関連法規・規範を遵守できる (臨床・臨地実習) <input type="checkbox"/> 多職種連携の必要性を知っている (臨床・臨地実習)	<input type="checkbox"/> 蔵本地区 / 学部連携 PBL チュートリアル課題レポート・評点平均 80% 以上・3 年前期末 <input type="checkbox"/> 口腔保健衛生学臨床実習, 口腔保健衛生学臨地実習・各科目 GPC2.5 以上・4 年後期末 <input type="checkbox"/> 相談援助実習・GPC2.5 以上・4 年前期末
4 新任者 レベル	<input type="checkbox"/> レベル 3 までをすべて満たしている <input type="checkbox"/> 多職種連携を実践できる <input type="checkbox"/> 歯科衛生士 / 社会福祉士としての倫理観・責任感をもつ <input type="checkbox"/> 歯科衛生士 / 社会福祉士として, 利他的・誠実・正直な行動ができる	

者で意見交換を行いながら問題点を可視化していくことは、徳島大学の他の学部にも活かすことができる先駆的な取り組みであると言える。また、今回、歯学部において多くの関係者が関わり、ワークショップを実施することができた理由には、歯学部の担当者である日野出教授、河野教授、運営の支援をしてくれた歯学部学務係の職員の尽力が不可欠であった。2023 年度も、引き続き今回のワークショップで明らかになった課題や、試行的に実施する評価で見えてきた問題点などを検討し、少しずつ教育プログラムの改善につなげてい

く予定である。

(吉田 博)

#### 4. 教育力開発コース

教育力開発コースは、授業設計、授業の実施・改善、教育活動を振り返り、自身の目標を明確にし、改善につなげるといった一連のプロセスを支援するものである。徳島大学においてはこれらの教育活動を重視しており、学外より講師または准教授採用後 1 年以内の教員、及び、学内で助教から講師または准教授昇任後 1 年以内の教員を対象に実施している。対象者は、まずステップ 1 とし

て「授業設計ワークショップ」を受講した後、ステップ2として「授業実践の振り返り」、または「授業参観・授業研究会」のいずれかを選択し受講することと定めている。これらのステップ1および2は必ず受講することが定められているが、加えてこれらのプログラムを受講後3年以内に、ステップ3である「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」を受講することが望ましいとしている。

#### 4.1 授業設計ワークショップ

##### 4.1.1 目的

授業設計ワークショップは、授業設計とアクティブ・ラーニングの手法について学び、模擬授業・授業検討会を行うことで、実践的に知識やスキルを修得するものである。本ワークショップの目標は次の4つである。

- ① FD活動の理念、活動計画を理解することができる。
- ② 授業を計画、実施し、評価する方法を体得することができる。
- ③ 授業研究の仕方を理解し、実践することができる。
- ④ FD参加者同士の仲間づくりができる。

2017年度からは参加者がワークショップの講義部分をビデオ教材で事前に学習してからワークショップに参加する、反転授業形式を導入している。また、2022年度においても2020年度、および2021年度に引き続き新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、当初対面研修として予定していた内容を、Zoomを活用したオンライン形式で実施した。

##### 4.1.2 概要

###### ■開催日程

2022年8月30日(火)・31日(水)

###### ■会場

オンライン (Zoom)

###### ■対象者

本ワークショップは四国地区大学教職員能力開発ネットワーク (SPOD) へ開放している。今年度は2019年度以来、学外の参加者の参加を認め

たが、最終的には参加者は2020年度、2021年度に引き続き、学内の対象者のみとなった。学内の対象者は、教育力開発コースの対象者、2021年度に実施した「授業設計ワークショップ」の欠席者、推薦を受けた者(助教及び、教授等)としてゐる。ただし、病院及び、プロジェクト採用等の場合は除いた。また、①学外で同様の研修を受けた場合、②担当する授業がない場合、③診療業務を主に担当している場合、についても参加を免除した。

###### ■参加者

2022年度の参加者は教員13名(徳島大学のみ)であり、詳細は次の通りである。

###### 【学内教員】

氏名	所属	職名
津村 秀樹	総合科学部	准教授
原田 武志	医学部	准教授
近藤 彩	医学部	講師
廣島 佑香	歯学部	講師
金井 純子	理工学部	講師
松井 紘樹	理工学部	講師
齋藤 有	理工学部	講師
山村 正臣	生物資源産業学部	准教授
鬼塚 正義	生物資源産業学部	講師
栗飯原睦美	生物資源産業学部	講師
林 順司	生物資源産業学部	講師
石丸 善康	生物資源産業学部	講師
中上 齊	教職教育センター	准教授

###### ■運営メンバー

運営メンバーは、理事(教育担当)、FD委員会委員長、FD委員会委員を含めた教員12名、学務部・高等教育研究センター職員5名の計17名であり、詳細は次の通りである。

氏名	所属	職名
長宗 秀明		副学長
齊藤 隆仁	教養教育院	副理事
内海 千種	総合科学部	教授
友竹 正人	医学部	教授
日野出大輔	歯学部	教授
立川 正憲	薬学部	教授
大山 陽介	理工学部	教授

田中 保	生物資源産業学部	教授
西田 憲生	医療教育開発センター	副センター長
吉田 博	高等教育研究センター	准教授
飯尾 健	高等教育研究センター	助教
塩川奈々美	高等教育研究センター	助教
瀬尾亜希子	学務部教育支援課	係長
岡辺 千春	学務部教育支援課	特任事務員
伊藤 典子	学務部教育支援課	事務補佐員
篠原 美玖	学務部教育支援課	事務補佐員
山崎 一恵	高等教育研究センター	技術補佐員

## ■内容

2 日間にわたり、表 3 の通りプログラムを実施した。実施にあたっては対面形式とオンライン形式の 2 通りを計画し、8 月前半時点での常三島地区の BCP レベルにより判断することとした。しかしながら、新型コロナウイルスの感染拡大状況や感染リスクを考慮し、8 月 8 日、常三島地区の BCP レベルにかかわらず、オンラインで実施することを決定した。

## ■全体の流れ

### [1 日目]

「(1) オリエンテーション」では、大学教育改革の流れや、本学の教育改革について説明を行った。特に、2020 年度以降にオンライン授業が一般化されてからの動向について、学生への様々なアンケートの結果を交え、授業設計について気を付けるべき点を紹介した。

続いて、授業設計ワークショップ全体の流れや教育力開発コースの意図や内容を説明し、昨年度の参加者の声を紹介して、参加者の動機づけを行った。

「(2) アイスブレイク」では、参加者同士がお互いについて知ることができるように、Zoom のブレイクアウトルームを活用して実施した。

「(3) ワーク授業設計の基本」では、事前にビデオ教材による講義「アクティブ・ラーニング」と「学習評価の仕方」を視聴した上で参加する、反転授業形式で実施した。教育改革推進部門のホームページで講義ビデオを公開し、同時に簡単なクイズに取り組むことができるようにした。

ワークでは、これらの動画を踏まえて講義を進

めると同時に、授業設計において注意すべき点において、個々に配布したワークシートに記入するワークを行った。

「(4) ワーク自身の教育理念」では、教育活動を行う上で、それぞれの教員が大切にしていることを整理しながら、教育理念を意識することの大切さを説明し、「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」の紹介と教育理念を整理するためのミニワークを行った。また、ミニワークの結果は Zoom のブレイクアウトルームを活用し、グループ内での共有を行った。

「(5) 講義・ワーク授業計画」では、シラバスや授業計画書の書き方について説明があり、徳島大学が定める「シラバス作成ガイドライン」が紹介され、目標設定の仕方や、その記述方法が解説された。続いて、これまでの講義やワークを踏まえて、参加者があらかじめ作成したシラバス、授業計画書の検討・修正を行った。その後、Zoom のブレイクアウトルームを活用し、参加者がペアでシラバスを交換して相互チェックを行った。

### [2 日目]

「(6) 模擬授業実施 (グループで実施)」では、参加者や運営メンバーがグループごとに各アカウント (Zoom : 4 アカウント) に分かれて、参加者全員が模擬授業を実施した。各グループには FD 委員、高等教育研究センターの教員がコンサルタントや司会者として入り、支援を行った。はじめに参加者が模擬授業を実施する授業のシラバスと授業計画書を説明し、その中からある一部分の 15 分間を切り取り、その模擬授業を実施した。グループの参加者は学生役として模擬授業に参加した。その後、授業検討会を行い、参加者がお互いに良い点、改善点について話し合いながら、授業を良くするために取り組むことなどを話し合った。

「(7) 模擬授業の振り返り」では、模擬授業に対する全体的なコメントがあり、その後参加者がワークシートをもとに自身の模擬授業を省察し、グループのメンバーからもらった意見をまとめ、今後のアクションプランを作成した。その後、Zoom のブレイクアウトルームを活用し、グループ内で共有を行った。最後に、数名の参加者から、研修で学んだことやアクションプランを紹介して

表 3 授業設計ワークショップ  
**授業設計ワークショップ日程 (第 1 日目)**

日時：令和 4 年 8 月 30 日 (火)

場所：オンライン (Zoom)

時刻	内 容	講師・担当者	備 考
12:30-12:50	・受付 ※ 12:45 までに Zoom ミーティングへ参加ください		11:00AM 徳島市に「大雨警報 かつ暴風警報」または「洪水 警報かつ暴風警報」が出て いたら中止
12:50-13:30	(1) オリエンテーション ・はじめに (副学長より挨拶) ・大学教育改革の流れ ・教育の内部質保証方針 ・研修のねらいと意義	吉田 博(進行) 副学長(教育担当) 長宗 秀明 FD委員会委員長 齊藤 隆仁	Zoom ミーティングへ 参加
13:30-13:50	(2) アイスブレイク「課題・目標設定」 ・参加者自己紹介・交流	塩川奈々美	Zoom ミーティングへ 参加
13:50-14:00	休憩		
14:00-15:00	(3) ワーク「授業設計の基本」 ・成績評価の意義・方法 ・アクティブ・ラーニングの理論と効果 ・学生の学習を促す授業方法	飯尾 健	Zoom ミーティングへ 参加
15:00-15:10	休憩		
15:10-16:10	(4) ワーク「自身の教育理念」 ・授業で大切にしていること	吉田 博	Zoom ミーティングへ 参加
16:10-16:20	休憩		
16:20-17:45	(5) 講義・ワーク「授業計画」 ・シラバス・授業計画書の書き方 ・シラバス・授業計画書の修正 ・2 日目の模擬授業の進め方について	塩川奈々美 スタッフ全員	Zoom ミーティングへ 参加

**授業設計ワークショップ日程 (第 2 日目)**

日時：令和 4 年 8 月 31 日 (水)

場所：オンライン (Zoom)

時刻	内 容	講師・担当者	備 考
9:00-9:30	・集合、模擬授業準備 (教材印刷が必要な場合は 9:00 集合)	スタッフ	Zoom ミーティングへ 参加
9:30-12:00	(6) 模擬授業実施 (グループで実施) ・FD 委員紹介、流れの確認 【模擬授業の流れ】(1 人 30 分× 4 人 (休憩適宜)) ・シラバス・授業計画書等の紹介 (5 分) ・模擬授業の実施 (15 分) ・授業検討会 (10 分) →チェックリストをもとによかった点、改善点等を 検討する。	各班司会： FD 委員 ワーク支援： スタッフ全員	各グループのオンラ インツールへ参加
12:00-13:00	休憩 各自で昼食		
13:00-13:40	(7) 模擬授業の振り返り ・模擬授業検討会を受けて授業の改善点 ・今後のアクションプラン	吉田 博	Zoom ミーティングへ 参加
13:40-14:10	(8) 教育力開発コース概要 ・教育力開発コースの意義・内容	飯尾 健	Zoom ミーティングへ 参加
14:10-14:40	(9) プログラムのまとめ ・講評 ・修了証書授与 ・アンケート ・おわりの言葉	吉田 博(進行) 副学長(教育担当) 長宗 秀明 FD委員会副委員長 田中 保	Zoom ミーティングへ 参加

もらい、全体での共有を行った。

「(8) 教育力開発コース概要」では、《授業設計ワークショップ》⇒《授業実践の振り返り》⇒《授業参観・授業研究会》⇒《ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ》と続く「教育力開発コース」の概要や意義が説明された。

「(9) プログラムのまとめ」では、ワークショップ全体に対する講評があり、終わりの言葉によって締めくくられた。修了証書の授与については、後日学内便にて参加者に送付した。

#### 4.1.3 アンケート結果

ワークショップ終了後に参加者 13 名を対象にアンケートを実施し、参加者全員から回答を得た。図 2 にアンケート結果の一部を示している。また、自由記述の代表的な回答は以下の通りである。

(1) 現在のあなたにとってレベルアップが必要なスキル・知識は何ですか。

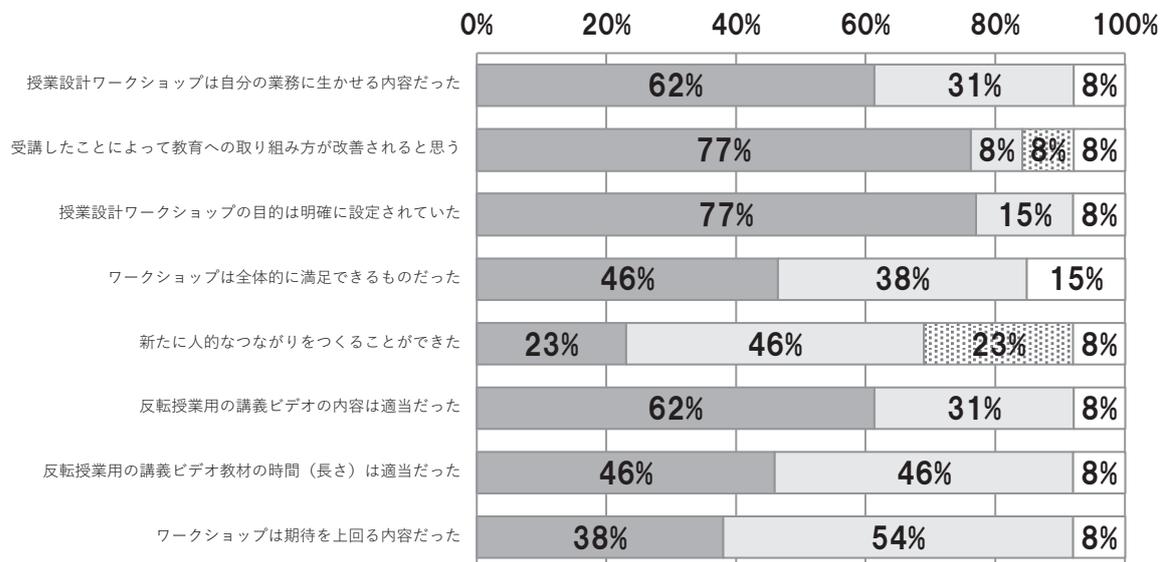
- ・ シラバス作成のスキル
- ・ より理解しやすい説明能力
- ・ Zoom 等のオンライン機器の操作や新しい機能のスキル

- ・ 学生が知識を身につけるためのモチベーション向上についての全般的な知識
  - ・ 学生が直接参加する授業（アクティブ・ラーニング、反転授業、ワークショップ形式）の運営方法
  - ・ 学生とのコミュニケーションの取り方
  - ・ 学生が興味を持ち、目的意識を持って参加できるような授業設計のスキル
- (2) 参加して良かったと思われる点を、具体的にお書きください。

- ・ シラバスや授業計画の基礎知識を学ぶことができた
- ・ 自身の課題が明確になった
- ・ 他の先生の講義を見ることで参考になる点を得られた
- ・ 自身の教育理念と大学の理念を再確認できた
- ・ 今後の授業計画の改善につながる指摘をもらえた

(3) 研修をよりよいものにするために改善すべき点があれば、具体的にお書きください。

- ・ 参加者同士の交流を深めるためには、対面が望ましい



- 4. そう思う
- 3. どちらかといえばそう思う
- ▨ 2. どちらかといえばそう思わない
- 1. そう思わない
- 無回答

図 2 授業設計ワークショップアンケート結果

- ・ 修正や準備の時間が必要なため、事前課題の添削結果をもう少し早めに返却してほしい
  - ・ 9月に近づくとも後期の授業準備や学会、大学院入試と重なるため、時期を考慮してほしい
- (4) その他、お気づきの点があればお書きください。
- ・ 今回のワークショップはどちらかというと集中講義や一般教養科目向きであると感じた
  - ・ 資料の配布方法を検討してほしい（学内便よりもメールの方が適切か）

#### 4.1.4 成果と課題

今回のアンケート結果から、「授業設計ワークショップは自分の業務に生かせる内容だった」「授業設計ワークショップの目的は明確に設定されていた」「ワークショップは全体的に満足できるものだった」「ワークショップは期待を上回る内容だった」という設問において、無回答を除く全ての回答者から肯定的な回答が寄せられたほか、「受講したことによって教育への取り組み方が改善されると思う」の設問でもほぼ全員から肯定的な回答が得られた。また自由記述からも、シラバスや授業設計に関する知識を習得できたこと、模擬授業を通じて他の教員の実践を見たり、自身の授業実践に向けた改善点を得られたりした点が有用であった点が挙げられた。これらのことから、本ワークショップの目標として掲げられている4点について、参加者はおおむね達成できたと考えられる。また、反転授業用の講義ビデオについても肯定的な評価が得られており、授業設計に関する基本的な知識を押さえるものとなっていたと言える。

一方で課題としては、まず2020年度、2021年度から引き続いて、「人的なつながり」をどのように構築するかが挙げられる。オンライン環境では自由に会話できる機会が限られ、十分な意見交換を行うことの難しさが今年度も浮き彫りになった。さらに、今回特に課題として明らかになったのは、参加者がワークショップに集中できる環境の確保である。今回の参加者は各自の研究室からワークショップに参加していることが多かった。そのため、場合によっては来客や電話対応等があり、集中してワークショップに取り組むことが難しい環境にあることがワークショップでの対応の

中から示唆された。これは、すでにオンラインでの会議やワークショップ参加が一般的になり、その間に他の業務をこなす、あるいはこなせるという習慣が根付きつつあることも一因であると考えられる。

次年度は、以上の成果と課題を活かし、内容面・環境面の両面において、より効果的に実施できるようなワークショップを計画することが必要である。  
(飯尾 健)

#### 4.2 授業実践の振り返り

##### 4.2.1 目的

授業実践の振り返りは、日常的な授業における実践を振り返ることで、授業の設計・実施の見直し及び改善までの取り組みを支援するものである。教育力開発コースの対象者は、授業設計ワークショップの次に受講するプログラムであり、ワークショップで修得した内容を実践で活かすためのものである。

##### 4.2.2 概要

対象者は、自身が担当する授業のうち、ある1日の授業を1つ設定し、その授業の「①シラバス」、その日の「②授業計画書」を準備する。続いて、学生アンケート（指定様式）を実施し、アンケート結果を踏まえて、「③授業実践の振り返りシート」を作成する（図3）。

対象者が作成した①②③の資料を基に、所属学部のFD委員長が授業におけるPDCAサイクルが構築されているか否かの確認を行う。その後、全学のFD委員会において、「③授業実践の振り返りシート」の内容について確認し、問題がない場合に承認を得る。この承認をもって本プログラムの修了とする。

##### 4.2.3 実施報告

2022年度は表4の通り、9名の教員が実施し、全員がFD委員会において承認を受けた。

(塩川奈々美)



まり、時間経過、特筆すべき発言や出来事など)。授業参観終了後、続いて授業研究会を実施する(対象教員の都合により別日に実施される場合もある)。ここでは、対象教員と授業を参観した教員が、授業内容について議論を行う。この中で授業の様子を振り返りつつ、学生アンケートの結果を確認し、うまくいっている点や工夫されている点を共有し、困っている点を解決するためのアイデアについて意見交換を行う。

#### 4.3.3 実施報告

2020 年度以降、授業を実施する際は新型コロナウイルス感染症対策が講じられ、2 年が経過した今も多くの授業がオンラインで実施されている。授業参観・授業研究会も同様にクラスター(集団)感染が起りやすい、密閉空間、密集場所、密接場面(3 密)を避けることが求められる中での実施となった。

2022 年度に実施された授業参観・授業研究会 3 件のうち 2 件はオンラインで行われたが、うち 1 件は 2 年ぶりに対面での実施となった(表 5)。オンラインで行われた授業では、スライド資料を利用した解説だけでなく、Zoom のチャットやコメントスクリーンを利用した双方向的な授業が展開されるなどオンラインならではの方法で授業を実施する創意工夫が見られた。対面の授業においても、教員による積極的な学生への働きかけにより理解度の把握が試みられ、アクティブ・ラーニングを意識した授業運営の様子が認められた。授業参観後の授業研究会においては、対象教員が所属する部局からの参観者が引き続き研究会にも参加したことで、多くの意見が共有され、活発な議論が行われた。高等教育研究センターの担当者以外に、同じ分野の教員による議論がなされたことで、対象教員にも良い刺激となり、授業実践内容

の振り返りが促進されたようである。

(塩川奈々美)

#### 4.4 ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ (TPWS)

##### 4.4.1 背景

徳島大学では 2011 年度より実質的な FD の取り組みを進めるため、「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ(以下、TPWS)」を開催している。2017 年度までに合わせて 27 名が TPWS に参加した。参加者の満足度は非常に高く、教育改善に有効的であることが示されているが、例年参加者が少ないことが課題とされている。TPWS は、メンターが寄り添い、話し合いを重ねながらティーチング・ポートフォリオ(以下、TP)を作成するため、オンラインで実施することは困難である上に、参加者同士の協働により進める部分があるため、参加者数が 2 名に達しない場合はワークショップを開催しないこととしている。このため、2018 年度以降参加希望者が 2 名に達しないことや、新型コロナウイルス感染症への対応からワークショップが実施できていなかった。

2022 年度は、TPWS を対面で開催することとなり、2 名の参加希望があったことから、5 年ぶりに TPWS を開催することができた。

##### 4.4.2 概要

###### ■開催日程

2022 年 9 月 14 日(水)～9 月 16 日(金)

###### ■会場

教養教育 6 号館 2 階 201・202 講義室

###### ■参加者

氏名	所属	職名
岡田 麻里	香川県立保健医療大学	准教授
石井 悠加	四国大学	助教

表 5 授業参観・授業研究会による修了者

実施日	学部・学科等	氏名	授業名	授業方法
6 月 15 日	総合科学部	山口 博史	総合科学の基礎 H	オンライン
11 月 1 日	医学部保健学科	近藤 彩	災害看護	オンライン
11 月 17 日	教職教育センター	中上 斉	生徒指導論	対面

■運営メンバーおよびメンター

氏名	所属	職名
齊藤 隆仁	教養教育院	副理事
吉田 博*	高等教育研究センター	准教授
飯尾 健	高等教育研究センター	助教
塩川奈々美	高等教育研究センター	助教
瀬尾亜希子	学務部教育支援課	係長
伊藤 典子	学務部教育支援課	事務補佐員
篠原 美玖	学務部教育支援課	事務補佐員

\*はメンター及びスーパーバイザー担当教員

■内容

3日間にわたって表6のプログラムを実施した。TPWSの様子は図4の通りである。



図4 TPWSの様子

4.4.3 成果と課題

TPWSでは、高等教育研究センター教育改革推進部門教員も情報交換に参加し、TPの作成経験があるFD委員会委員長も一部のプログラムに参加することで、参加者は2名であったが、TPの作成を通して様々な情報共有が行われた。

TPWS終了直後に実施した参加者アンケートでは、TPWSの満足度、TP作成の成果、運営スタッフに関するすべての設問で肯定的な回答が得られた。また、自由記述では、「あらためて、自分がこの実習を大切にしたいと考えている理由や背景を見直すことができました。(中略)達成感を感じました。」「自分の中の教育理念をことばにしたことで今後の目標が明確になりました。(中略)自信を持って挑戦できるような気がします。」という意見が挙げられており、TPWSにおいてTPを作成することが、今後の教育活動にとって有益なものになっていることが窺える。

今後は、TPWSのメンターを担当できる教員を確保し、定期的にTPWSを開催することや、徳島大学内においてTP作成に関する意義を共有できるように、TPの簡易版であるTPチャート作成ワークショップを開催するなど、広報活動に努める必要がある。(吉田 博)

5. 授業について考えるランチセミナー

5.1 目的

「授業について考えるランチセミナー」は、アクティブ・ラーニングや新しい教育技術、教育ツールを全学的に普及していくために、教職員、大学院生を対象に教授学習に関するテーマでマイクロレベルのFDプログラムを計画的に実施するものである。また、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク(SPOD)のFDプログラムとして、四国地区にも開放している。

本セミナーの位置づけとして、「気軽に参加でき、かつ充実した情報を提供する」というものである。すなわち、他の業務や研究を行いながら気軽に参加できるとともに、教員による実践事例や学生の声を紹介するといった、授業改善に役立つ有益な情報を提供・共有できることを目指したものである。この位置づけのもとに、今

表 6 ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ  
第 1 日 (2022 年 9 月 14 日・水曜日)

時刻	内 容	備 考
11:30-12:00	受付	
12:00-12:30	オリエンテーション ・はじめに (全学 FD 委員会委員長よりあいさつ) ・自己紹介 (スタッフ・参加者) ・ティーチング・ポートフォリオとは	201 講義室
12:30-13:30	アイスブレイク 昼食 ・初校へ向けての共通アドバイス ・メンター, 参加者との交流	201 講義室
13:30-15:00	ティーチング・ポートフォリオ・チャートの作成	201 講義室
15:00-16:00	第 1 回 個人ミーティング 各自メンタリングルームへ移動	ミーティングルーム
16:00-17:00	TP 作成作業	201 講義室

第 2 日 (2022 年 9 月 15 日・木曜日)

時刻	内 容	備 考
9:00-10:00	TP 作成作業	201 講義室
10:00-11:00	第 2 回 個人ミーティング 各自メンタリングルームへ移動	ミーティングルーム
11:00-12:00	TP 作成作業	201 講義室
12:00-13:00	意見交換 昼食 ・第 1 稿に共通するコメントと情報共有 ・第 2 稿をまとめるにあたって	201 講義室
13:00-14:00	第 3 回 個人ミーティング 各自メンタリングルームへ移動	ミーティングルーム
14:00-17:00	TP 作成作業	201 講義室

第 3 日 (2022 年 9 月 16 日・金曜日)

時刻	内 容	備 考
9:00-10:00	TP 作成作業	201 講義室
10:00-10:30	第 4 回 個人ミーティング 各自メンタリングルームへ移動	ミーティングルーム
11:00-12:00	TP 作成作業	201 講義室
12:00-13:00	意見交換 昼食 ・第 3 稿をまとめるにあたって ・TP 披露の形式説明 ・TP の活用方法 (ワーク)	201 講義室
13:00-14:00	TP 作成作業 ・プレゼンテーションの準備 (A4 版・一枚程度)	201 講義室
14:00-15:00	プレゼンテーション準備	201 講義室
15:00-16:00	TP 披露・修了式 ・メンティーによるプレゼンテーション ・修了証授与 (全学 FD 委員会委員長より) ・記念写真 ・ワークショップを振り返って	201 講義室

年度も引き続き、月 2 回、昼休みの 12 時 5 分から 50 分まで、同じテーマで週ごとに異なる内容のセミナーを Zoom によるオンラインで実施した (図 5)。

また今年度の大きな変更点として、高知大学学び創造センターとの共催に移ったことが挙げられる。これにより、高知大学学び創造センターの教員も一部テーマについて企画・実施に携わることとなった。また広報も高知大学学び創造センターから行えることとなったため、高知大学ならびに高知県内の大学の教員へ広く周知することが可能となった。

## 5.2 概要

表 7 に示した通り、10 のテーマで計 20 回のセミナーをオンラインで実施し、延べ 753 名の教職員、大学院生、学部学生が参加した。

## 5.3 成果と課題

プログラム終了直後、参加者を対象にアンケートを実施し、延べ 282 名から回答を得た。アンケートの設問のうちプログラムの成果に関する 4 件法のアンケート結果は図 6 の通りである。

アンケートの結果から、「今後の授業や教育活動に活かせる情報を得ることができた」、「本セミナーは今後の教育活動において有益なものであった」をはじめ、いずれの設問でも「とても当てはまる」と「どちらかと言えば当てはまる」を合わせた肯定的な回答について、90% を超える回答率を得ることができた。同時にアンケートでの本セミナーに参加して良かった点・有益であった点を自由記述式で問う設問では、「実際の取り組み

や、教員の工夫を知ることができた」「授業に使えるツールについて知ることができた」「他大学での取り組みを知ることができた」「学生の生の声を聞くことができた」といったものが見られた。これは、本セミナーがオンラインで実施する利点を活かし、学生や学内外の登壇者を招き、教員の実践例や学生がどのように授業を受講しているかを積極的に紹介したことが好意的に受け止められたことの表れと言える。また、オンライン授業や配慮が必要な学生への対応等、セミナーのテーマも現在の大学教育において早急な対策が求められるものであった点も、教員のニーズに応えられたものであったと言える。また、本セミナーは SPOD 開放プログラムであり、加えて今年度からは高知大学学び創造センターからの広報も行われた。それにより、学外から多数の教員が参加した。今年度は特に高知大学の教員が増加し、延べ参加者のおよそ 3 割が高知大学の参加者であった。また、徳島大学からの参加者は 6 割、それ以外の大学からの参加者は 1 割であった。

今年度は高知大学学び創造センターとの共催となることで、セミナー内容のさらなる充実とともに、より幅広い範囲の教員の参加が可能となった。

一方で、今後は高知大学学び創造センターとの共催の範囲を広げ、より多様なテーマを扱うことが期待される。またアンケート結果からは、実際に教員がどのような教育実践を行っているかを知りたいというニーズがあることが分かった。このためには、より多くの教員との関係づくりを行い、特徴的な授業実践に関する情報を収集する必要がある。さらには、ポストコロナを視野に入れれば、オンラインだけでなく、対面による参加も可能と

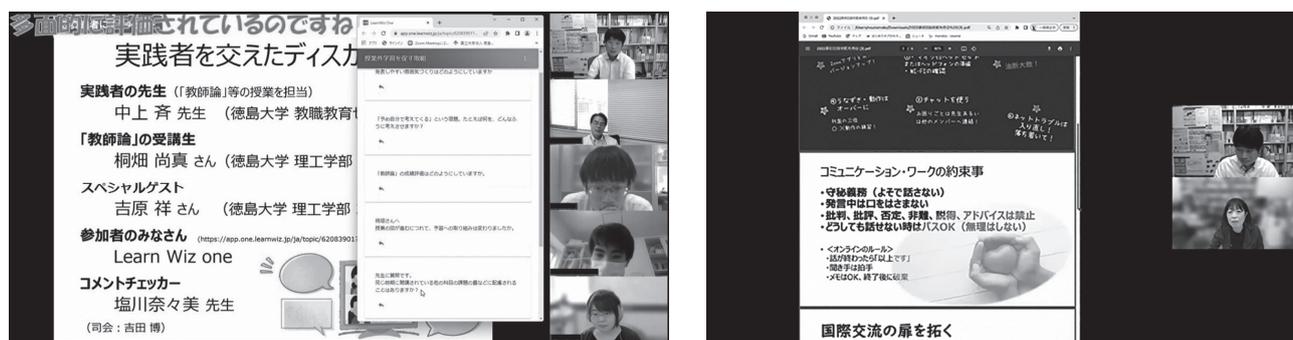


図 5 「授業について考えるランチセミナー」実施風景

表 7 2022 年度「授業について考えるランチセミナー」実施状況

テーマ	講師	実施日	参加者数
1 双方向的な授業を行う①	吉田 博 (徳島大学高等教育研究センター)	4月14日	44名
		4月21日	36名
2 多様な学習評価①	飯尾 健 (徳島大学高等教育研究センター)	5月12日	30名
		5月19日	34名
3 学生に授業外学習を促す	吉田 博 (徳島大学高等教育研究センター)	6月9日	60名
		6月16日	59名
4 ユニバーサルデザインな視点での授業づくり	高橋 由子 (高知大学学生総合支援センター)	7月14日	45名
		7月21日	34名
5 教育実践の成果を報告しよう①	飯尾 健 (徳島大学高等教育研究センター)	9月8日	40名
		9月15日	31名
6 双方向的な授業を行う②	塩川奈々美 (徳島大学高等教育研究センター)	10月13日	38名
		10月20日	32名
7 多様な学習評価②	飯尾 健 (徳島大学高等教育研究センター)	11月10日	38名
		11月17日	40名
8 オンライン授業の工夫あれこれ	高畑 貴志 (高知大学学び創造センター)	12月8日	38名
		12月15日	28名
9 教育実践の成果を報告しよう②	塩川奈々美 (徳島大学高等教育研究センター)	1月12日	29名
		1月19日	30名
10 学生の多様化と学生支援	西本 佳代 (香川大学大学教育基盤センター)	2月9日	35名
		2月16日	32名

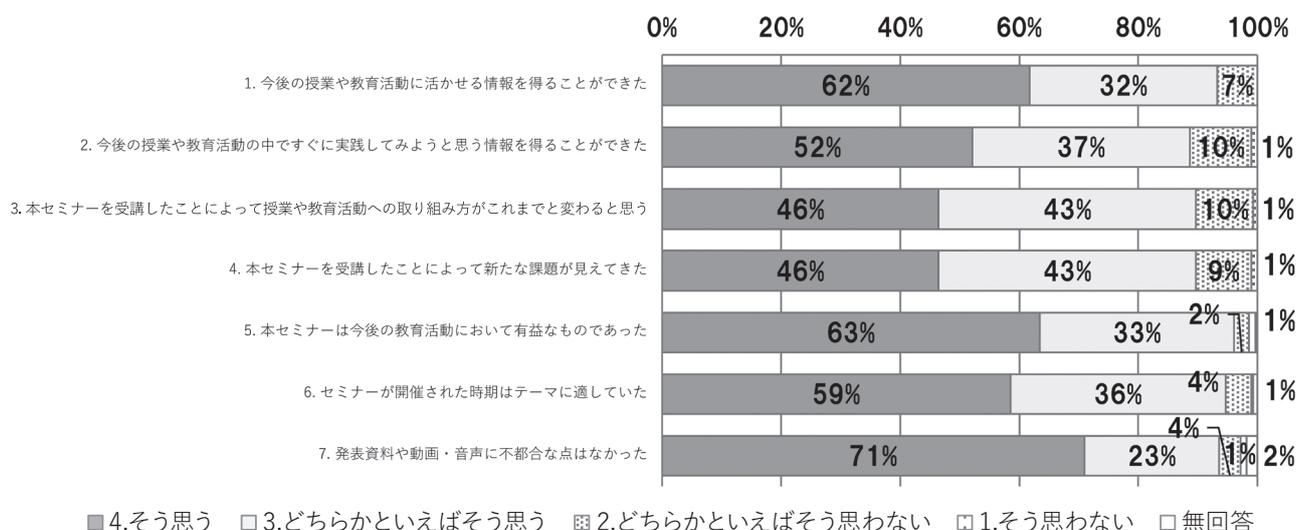


図 6 「授業について考えるランチセミナー」アンケート結果

したハイブリッド（ハイフレックス）形式でのセミナーの実施の可能性を探ることも求められる。これにより、オンライン形式での課題であった参加者間、あるいは参加者と講師での意見交換や関係づくりを促すことが期待できる。（飯尾 健）

## 6. SIH 道場担当者 FD

SIH 道場授業担当者が SIH 道場の設置背景とな

る大学教育再生加速プログラムの概要や自身が担当する SIH 道場の詳細について理解を深め、SIH 道場の授業を担当するために必要な知識と技能を修得するために、「2022 年度 SIH 道場授業担当者 FD」を開催した。

SIH 道場とは、本学で開講する全学初年次教育プログラム「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」を指す。本学が 2014 年度に採択された

文部科学省大学改革推進等補助金事業「大学教育再生加速プログラム (テーマ I :アクティブ・ラーニング)」の取り組みとして 2015 年度から導入された。全学 1 単位必修の科目であるが、内容はそれぞれ専門分野毎に異なり、i : 専門分野の早期体験、ii : ラーニングスキル (文章力・プレゼンテーション力・協働力) の修得、iii : 学修の振り返り、これら 3 つの目標が共通する授業設計項目として設定されている。

授業担当者は原則として年度ごとに交代することになっているため、補助金期間中における本 FD は毎年度実施し、義務に近い形での参加を呼びかけてきた。2020 年度より、SIH 道場のマネジメントは完全に SIH 道場の実施単位である各学部学科等に委ねられたため、本 FD への参加も完全に任意となるが、部局独自の SIH 道場実施に向けた授業担当者への情報共有の場としても重要な意味合いを持つ。本節では、こうした位置づけである「2022 年度 SIH 道場担当者 FD」の実施概要を報告する。

## 6.1 目的

本 FD の狙いは、授業設計コーディネーター、SIH 道場授業担当者が SIH 道場の概要を把握するとともに、SIH 道場で役立つ教育手法やそのツールについて学ぶ機会を提供することにある。今年度のプログラムでは、参加者に SIH 道場の理念や授業設計における必須項目について解説し、授業設計コーディネーターや授業担当者の役割を確認したほか、学習の振り返りに有効となるポートフォリオに関する説明や活用事例の紹介、学生の学修を促す授業設計として SIH 道場の共通設計項目である 3 つのラーニングスキル (文章力・プレゼンテーション力・協働力) に関する設計と評価についての解説を行うことで、SIH 道場の円滑な実施・運営の支援を目指した。本 FD の目標は次の 3 つである。

- ① SIH 道場授業担当者が当該学科の SIH 道場の背景やその詳細について理解し、SIH 道場の授業を担当するために必要な知識と技能を習得する。
- ② SIH 道場が OJT 型の FD であることや授業実

施から振り返りまでのプロセスについて理解する。

- ③ 前年度の実施内容を情報共有し、振り返ること
- で、ウィズコロナ時代を見据えた SIH 道場の実施を検討し、今年度実施に向けた計画の見直しをもつ。

## 6.2 概要

### ■開催日時

2022 年 1 月 28 日 (金) 16:30-17:40

### ■会場：オンライン (Zoom)

新型コロナウイルス感染症対策のため、2022 年度も Zoom を利用したオンライン形式での実施とした。

### ■参加者

今年度の参加者は、常三島キャンパスならびに蔵本キャンパスの教職員 31 名である。

### ■運営メンバー

運営メンバーは、高等教育研究センター教育改革推進部門を含め、詳細は次の通りである。

氏名	所属	職名
吉田 博	教育改革推進部門	部門長・准教授
飯尾 健	教育改革推進部門	助教
塩川奈々美	教育の質保証支援室	助教
金西 計英	学修支援部門 EdTech 推進班	教授
福井 昌則	学修支援部門 EdTech 推進班	准教授

### ■内容・全体の流れ

「SIH 道場の概要」では、SIH 道場の目標、内容、実施体制、授業設計の必須項目について解説を行い、高等教育研究センター各部門による支援や提供される教材 (テキスト・動画教材など) について説明した。さらに、SIH 道場の改善に向けた評価として、学生アンケートや教員アンケートの各種アンケートの結果や「2022 年度 SIH 道場の実施に関する実態調査」の結果について情報共有を行った (表 8)。

「e ポートフォリオの活用」では、振り返りの意義やポートフォリオの考え方について整理を行った上で、e ポートフォリオの活用事例について紹介がなされた。本学では教務システムに学生

表 8 2022 年度 SIH 道場授業担当者 FD

時間	内容	詳細項目	担当者
15 分	SIH 道場の概要	①目的・概要 ② 2021 年度の実施事例紹介	塩川奈々美
20 分	e ポートフォリオの活用	① e ポートフォリオの概要 ② e ポートフォリオの活用事例紹介	金西 計英 福井 昌則
30 分	学生の学習を促す授業設計	文章力・プレゼン力・協働力に関する設計と評価 (オンラインでの実践方法を含む)	吉田 博 飯尾 健
5 分	質疑応答		

の学修成果が可視化されるシステムが構築されているほか、LMS を用いた e ポートフォリオ作成機能が利用できる環境にある。教育指導の現場において学生自身が自らの学びを振り返り、その後の学習に活かす習慣が身に付くよう、教員側も学生に学習の振り返りの機会を提供し、適宜フィードバックを行うような体制が求められている。

「学生の学習を促す授業設計」では、SIH 道場の授業設計で求められる必須項目「ラーニングスキルの習得」について授業設計で役立ててもらえるよう、文章力・プレゼンテーション力・協働力に関する授業設計や評価について解説を行った。オンラインでの SIH 道場実施も想定した授業設計とその実施方法について紹介を行うとともに、実施方法を検討する際に参考になる「学生の学習を促す授業事例カード」を紹介した。また、ラーニングスキルについて解説する動画とその内容の振り返りになるクイズ等が提供される SIH 道場テキストについても紹介を行い、授業実施方法を検討する上での利活用を促した。

### 6.3 成果と課題

FD 終了後に研修内容に関するアンケート調査を実施した (図 7, 回収率は 87% (n=20))。アンケート回答者のうち、参加者の職種は「教員 (SIH 道場授業担当者)」は 65%, 「教員 (授業設計コーディネーター)」は 30%, 「職員」は 5% であった。例年開催している本 FD への参加経験については 45% が「以前参加したことがある」と回答しており、過半数は「今年度が初めての参加」と回答した。

SIH 道場担当者 FD について質問した結果、「SIH 道場の目的の理解」や「オンライン授業における双方向性の確保への理解が深まった」「本 FD の全体的な満足度」に対する肯定的意見は 90% を超えた。「教務システムの活用方法が理解できた」「オンライン授業での成績評価・出席確認の方法や効果への理解が深まった」についても、80 ~ 85% の参加者が理解できたと回答した。

本 FD に関する自由記述を見ても、

- ・ SIH 道場の開催意義が理解できました。
- ・ ツールを十分に使いこなせていないので、参考になりました。ただ、フィールドワークや実験にとってはまだ課題があります。
- ・ 初めて参加させて頂きましたが、大変勉強になりました。1 年生だけでなく、研究室の学生さん (4 年生・大学院生) の中にも基本ができていない学生もいますので、随所で、是非学び直しさせたい内容でした。

(下線は筆者による。)

など、FD の内容に満足いただけただけの声が窺えた。SIH 道場の業務に関する FD として、概説的に SIH 道場に関する情報を共有することができたと言える。一方、「今後は、資料は事前に配布もしくは会議開始直後にアップしてもらいたい」「コロナ禍の中、益々オンライン化が進むと考えておりますので、より精度の高い授業評価法なども今後ご検討いただくと助かります」といった FD の運営に関する意見や取り扱ってもらいたいテーマなど、具体的な意見も得られた。当日の資料配付だけでなく事前に申込者に資料配付を行うことについては次年度対応し、FD で実施するテーマに

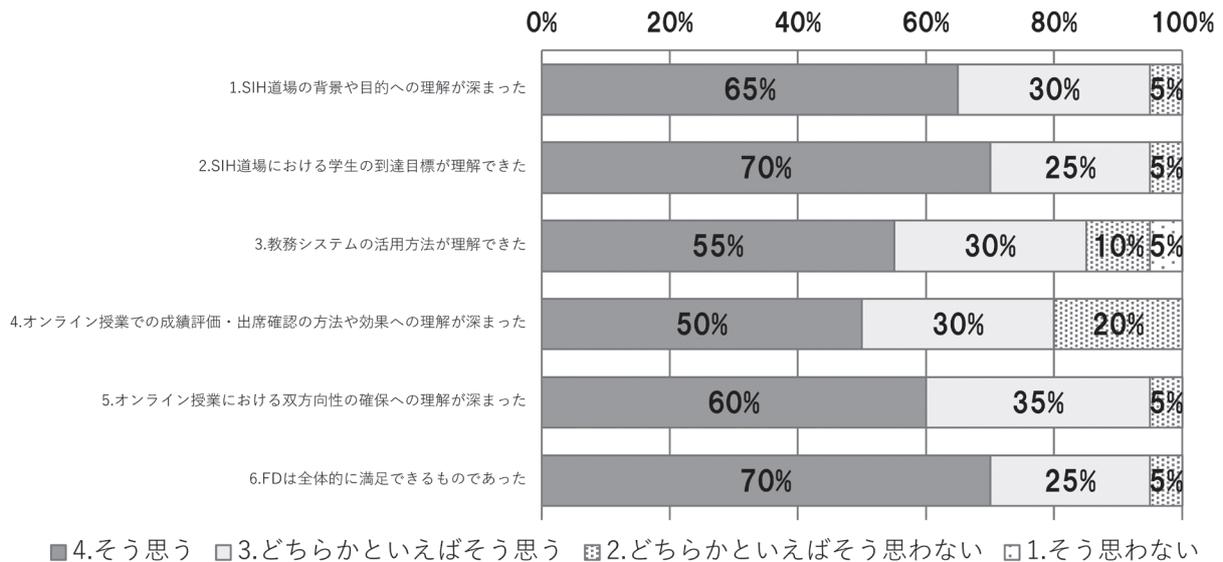


図 7 2022 年度 SIH 道場 FD アンケート結果 (n=20)

については担当者間で協議したい。

また、「新教務システムの使用方法への理解」については他項目に比べ肯定的意見が低い割合にとどまった。こうした教材や LMS は実際に使用中で使い方を理解していくものであり、その活用方法も様々であることから、単発の FD における紹介ですべてを理解いただくことは難しい。上に引用した自由記述からもわかるように、説明内容に関する満足度は得られていることから、日常の業務において実際に利用する中で出てくる疑問点などを解消するような支援が求められるだろう。

2022 年度の SIH 道場は新型コロナウイルス感染症対策を講じる中でできる方法が模索され、各部署の工夫のもと実施された。全部局が取り組んだ暁には、本年度の担当者がどのように対応したのかその実態を調査し、「2023 年度 SIH 道場授業担当者 FD」において次年度担当者への情報共有を図りたい。(塩川奈々美)

## 7. 大学教育カンファレンス in 徳島

### 7.1 目的

大学教育カンファレンス in 徳島は、教育活動の成果を検証し、教育実践研究を充実・発展させる機会となるよう、本学や他の高等教育機関で行われている教育実践の先駆的な取り組みを共有

し、大学教育の質的向上に向けた努力の成果を確認することを目的としている。2005 年度から実施しており、今回で 18 回目となる。2022 年度も、2021 年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、Zoom によるオンラインでの実施をメインとして、一部に対面会場を設置することで、参加者同士の情報交換や自由な交流を行うことができるようにハイブリット形式で実施した。

### 7.2 概要と成果

#### ■開催日時

2022 年 12 月 27 日 (火) 9:00-17:30

#### ■会場

オンライン (Zoom)

対面会場 (常三島キャンパス 地域創生・国際交流会館)

#### ■概要

全体の参加者は学外からの参加者 31 名を含む、157 名であった。研究発表の件数は、口頭発表 18 件、ポスター発表 8 件、ワークショップが 1 件であり、特別講演が 1 件行われた (表 9)。

2022 年度は、コロナ禍 3 年目となり、これまでのオンライン形式による実施を活かした上で、対面による発表も取り入れることを視野に入れて準備を進めてきた。運営スタッフと検討を重ね、

感染対策や会場運営の負担などを踏まえ、オンラインをメインとして、一部に対面会場を設置するハイブリッド形式の実施となった。口頭発表、ポスター発表では、1つのアカウント内に Zoom のブレイクアウトルーム機能を活用して、発表会場またはポスターごとにルームを設置し、参加者は自由にルーム間を移動できるように設定した。このうち、口頭発表 6 件、ポスター発表 2 件の発表が対面会場からオンライン配信を行い、特別講演も対面会場で聞くことができるように投影を行い、全プログラム合わせて 35 名が対面会場に参加した。

過去 2 年間はオンラインで実施したことで、毎年改良しており、特に今回は発表者へ発表時間のアナウンスをスムーズに行うために、タイマーを表示し、座長が時間管理を行うなど一部運営方法を変更した。ワークショップは、異なるアカウントにおいて実施し、ブレイクアウトルームを活用したグループセッションや参加者同士のコミュニケーションがとられていた。特別講演は、関西大学教育推進部教育開発支援センター准教授の山田嘉徳氏による「コロナ禍で学生はどう学んでいたのかー遠隔授業と対面授業の効果的な共存を見据えてー」と題した講演が行われた。コロナ禍の学生の現状や特徴について、調査結果をもとに解説し、これからの大学教育や授業運営に対する具体的なアイデアを紹介していただいた。参加者が対面授業と遠隔授業の効果的な共存を図るうえで、重要な情報を得ることができた。

### 7.3 カンファレンスの成果と今後の課題

2022 年度は、オンラインによるカンファレンスの実施は 3 年目であり、一部に対面会場も設置することができた。また、これまでの実施によって明らかになった課題に対応して運営することができ、オンライン上でも過去と比較してスムーズに実施することができた。また、他の学会や研究会もオンラインで開催されており、運営スタッフ、参加者ともにオンラインで開催するカンファレンスへの参加に対する慣れもあり、Zoom へのアクセスやブレイクアウトルーム間の移動に関する操作の不安も 2021 年度と比べて減少していると感

じた。対面会場では、質疑応答の時間が足りないほど、議論が活性化し、発表時間外であっても参加者同士が情報共有する姿が見られた。

カンファレンスでは、参加者を対象にカンファレンス終了後に Web によるアンケートを実施しており、69 名から回答を得た (回収率 44%)。カンファレンスの成果に関するアンケート結果を図 8, 9 に示している。「a. 自分に必要な知識やスキルを身につけることができた」と「b. 参加したことによって業務の取り組み方が改善されると思う」、「c. カンファレンスの内容を十分に理解できた」という設問について、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」と回答した参加者が約 90% であり、2021 年度に引き続き肯定的な回答を得ている。これは、多くの参加者がカンファレンスの目的や意義を理解し、自身の能力開発を感じて参加したうえで、カンファレンスの内容がそれに資するものであったことを示唆している。「d. 他の参加者との交流を深めることができた」では、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」と回答した参加者が 2021 年度より増加したが、肯定的な回答は半数には達していない。このことから、ハイブリット形式で開催された効果も考えられるが、回答者の多くがオンラインのみの参加であることから、オンラインでの参加においては、参加者と交流を深めることは困難であることがわかる。図 8「有益であったプログラムをすべて選択してください (複数選択)」では、ワークショップを除いて (ワークショップ参加者の回答数は少ない)、すべてのプログラムで約 90% の参加者が有益であったと回答している。「e. 特別講演の内容は興味深かった」という設問においても、参加した回答者 (未回答を除く) の肯定的な回答の割合は、90% 以上に達しており、自由記述では「山田先生の対面アンケートに基づいた報告はとても説得力に富んでいて理解が深まりました。」という意見や「コロナ禍での授業形態の工夫点や今後の自己の課題について考える貴重な機会となった。」など、特別講演についてよかったという意見が多く寄せられた。「f. カンファレンスは全体的に満足できるものだった」という設問でも 94% が肯定的な回答をしており、多くの参

表 9 第 18 回大学教育カンファレンス in 徳島プログラム

会期:2022 年 12 月 27 日 (火) 会場:オンライン開催 (Zoom), 対面会場 (地域創生・国際交流会館 1 階)

8:30 ~ 9:00	受 付			
9:00 ~ 9:10	学長挨拶 河村 保彦			
9:15 ~ 10:15	<b>研究発表 I (口頭発表)</b>			
	<b>口頭発表 A</b> 座長: 大山 陽介 ＜A会場＞ A① 9:15 ~ 9:35 ■ガチャ課金動機とゲーム 利用方法から見たゲーム の適切な利用に関する基 礎的検討  高等教育研究センター 福井 昌則 他 ＜対面会場から配信予定＞	<b>口頭発表 B</b> 座長: 立川 正憲 ＜B会場＞ B① 9:15 ~ 9:35 ■オンライン環境を教室へ: 情報通信技術活用の制約 をどのように克服するか  大学院社会産業理工学研究部 山口 博史	<b>口頭発表 C</b> 座長: 田中 保 ＜C会場＞ C① 9:15 ~ 9:35 ■地域企業と学生の早期関 係構築を目的とした「エ クスターンシップ」の成 果と今後の展望  人と地域共創センター 松本 卓也 他	
	A② 9:35 ~ 9:55 ■大学生の深い学びにおけ るメタ認知について  高等教育研究センター 金西 計英 ＜対面会場から配信予定＞	B② 9:35 ~ 9:55 ■入学オリエンテーション での Youtube を用いた防 災学習について  環境防災研究センター 上月 康則 他	C② 9:35 ~ 9:55 ■鳥人間プロジェクトでの ワークショップを経た活 動内容の変化  理工学部理工学科 応用化学システムコース 2 年 齋藤 香乃 他	
	A③ 9:55 ~ 10:15 ■授業評価アンケートにみ る評価と課題 ー教養教育科目「ことば と社会」の授業改善に向 けてー  高等教育研究センター 塩川 奈々美 ＜対面会場から配信予定＞	B③ 9:55 ~ 10:15 ■徳島大学における入試広 報の検討 ー入試広報アンケート分 析からー  高等教育研究センター 上岡 麻衣子 他	C③ 9:55 ~ 10:15 ■PJWS を受けてプロジェ クト活動と加太共同打上 実験の成果  理工学部理工学科 応用化学システムコース 3 年 植松 賢悟 他	
	10:15 ~ 10:30	休 憩		
	10:30 ~ 12:00	<b>ワークショップ A</b> ＜A会場＞ ◆オンラインでインプロ (即興演劇) を体験してみよう! -Give your partner a good time!-  教養教育院 Gehrtz 三隅 友子		

<p>12 : 00 ~ 13 : 00</p>	<p>休 憩</p>
<p>13 : 00 ~ 14 : 00</p>	<p><b>ポスター発表</b>                      &lt;開催場所 : A会場&gt; 座長 : 吉田 博</p> <p>P① SPOD-FD マップ作成までのプロセスとその成果 高知大学 学び創造センター 杉田 郁代 他</p> <p>P② デジタル化が進む歯科診療の現状紹介と歯科補綴学実習における学習内容の検討 大学院医歯薬学研究部 細木 真紀 他</p> <p>P③ 学生活動の効率的な運営とマネジメント 大学院創成科学研究科 理工学専攻機械科学コース2年 前田 隼輝 他</p> <p>P④ COVID-19 の影響下での学生のイノベーションプラザにおける機器ライセンス 取得状況の変化と今後の取り組み 高等教育研究センター 亀井 克一郎 他</p> <p>P⑤ 3D プリンタを活用した AI/IoT 実習用ロボット教材の開発 技術支援部 辻 明典 他</p> <p>P⑥ 学生プロジェクト活動における業務負担とその軽減への考察 高等教育研究センター 森口 茉梨亜 他</p> <p>P⑦ 対面授業と遠隔授業を取り入れた学生実習の実践 教養教育院 渡部 稔 他 &lt;対面会場から配信予定&gt;</p> <p>P⑧ ロボコンプロジェクトにおけるワークショップ後の活動目的の見直しと変化 理工学部理工学科 機械科学コース3年 仲島 渉 他 &lt;対面会場から配信予定&gt;</p>
<p>14 : 00 ~ 14 : 15</p>	<p>休 憩</p>

<b>研究発表Ⅱ (口頭発表)</b>			
14 : 15 ~ 15 : 15	<p style="text-align: center;"><b>口頭発表A</b> 座長：内海 千種 <b>&lt;A会場&gt;</b> A④ 14 : 15 ~ 14 : 35 ■徳島大学における学習支援 Study Support Space の存在意義</p> <p>医学部保健学科 2 年 仲村 真樹 他 &lt;対面会場から配信予定&gt;</p>	<p style="text-align: center;"><b>口頭発表B</b> 座長：友竹 正人 <b>&lt;B会場&gt;</b> B④ 14 : 15 ~ 14 : 35 ■多様な社会人と実践的に学んだりベラルアーツ教育の効果検証</p> <p>高等教育研究センター 島 一樹</p>	<p style="text-align: center;"><b>口頭発表C</b> 座長：日野出 大輔 <b>&lt;C会場&gt;</b> C④ 14 : 15 ~ 14 : 35 ■大学での研究シーズを活用した共創的ワークショップの展開の一考察 ー光科学を中心とした高大連携の取り組みからー</p> <p>研究産学連携部 地域産業創生事業推進課 有廣 悠乃</p>
	<p>A⑤ 14 : 35 ~ 14 : 55 ■高大接続科目・数学でのオンラインテストの学習効果について</p> <p>大学院社会産業理工学研究部 大沼 正樹 &lt;対面会場から配信予定&gt;</p>	<p>B⑤ 14 : 35 ~ 14 : 55 ■双方向学修をめざす「時事問題」授業の展開～短大生のクラス参加を積極的にさせる試み～</p> <p>四国大学短期大学部 ビジネス・コミュニケーション科 蔵谷 哲也</p>	<p>C⑤ 14 : 35 ~ 14 : 55 ■阿波電鉄PJにおける対話型ワークショップを経たメンバーの自主的な活動についての経過報告</p> <p>理工学部理工学科 機械科学コース 2 年 谷坂 陸 他</p>
	<p>A⑥ 14 : 55 ~ 15 : 15 ■科学リテラシー教育を取り入れた消費者教育授業の実践</p> <p>教養教育院 南川 慶二 &lt;対面会場から配信予定&gt;</p>	<p>B⑥ 14 : 55 ~ 15 : 15 ■ A Step towards Assessing Japanese Culture Proficiency of International Students in-class</p> <p>高等教育研究センター チャン ホアン ナム</p>	<p>C⑥ 14 : 55 ~ 15 : 15 ■学生プロジェクト運営でプロジェクトを活発化させるために有効であった手法の結果とその考察</p> <p>理工学部理工学科 応用化学システムコース 4 年 松山 晃大 他</p>
15 : 15 ~ 15 : 30	休 憩		
15 : 30 ~ 17 : 30	<p><b>特別講演</b> 演題：コロナ禍で学生はどう学んでいたのか ー遠隔授業と対面授業の効果的な共存を見据えてー</p> <p>講師：山田 嘉徳 先生 (関西大学 教育推進部教育開発支援センター 准教授)</p>		

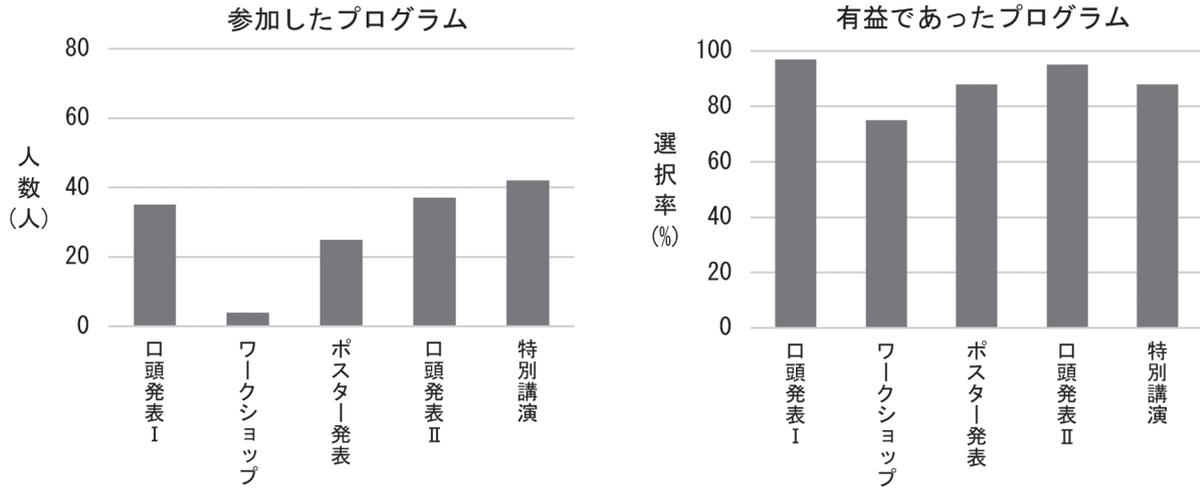


図 8 大学教育カンファレンスで参加したプログラムについて

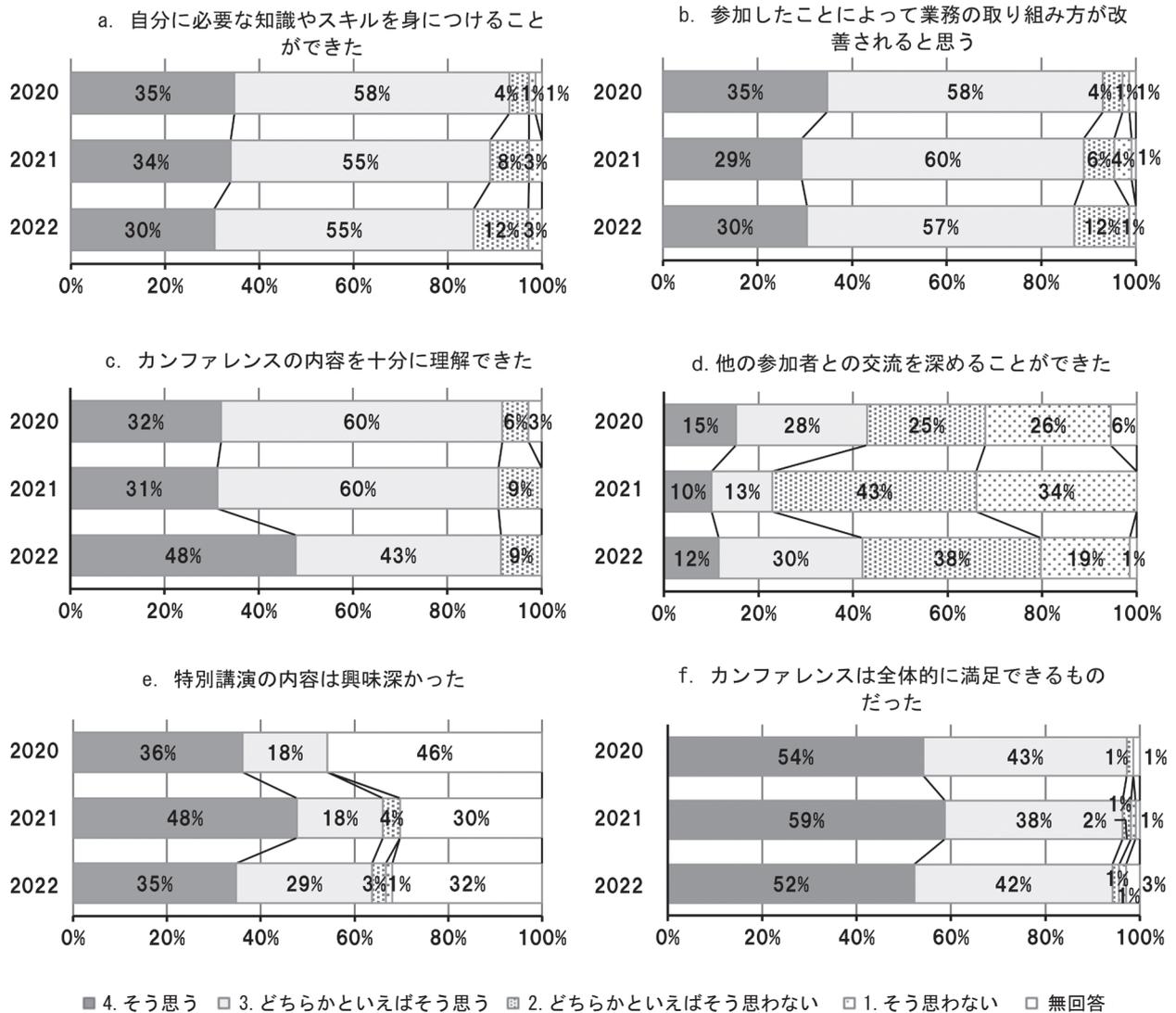


図 9 大学教育カンファレンスアンケート結果 (過去 3 年分)

加者にとって満足できるカンファレンスであったものと推察できる。

一方で、課題としては、ハイブリッド形式での運営に関する意見が挙げられた。具体的には、「対面会場が少しさびしかったかと感じました」、「ポスター発表の会場のポスターと発表者の位置が、カメラの位置と合っていないため会場に人が来たときに説明がわからなかった」、「今後も対面だけでなく、今回のようなオンラインとのハイブリッドにしてほしいです」、「今後は対面メインでサブ的な形でオンライン接続を検討してもらえると大変良いのではないかと思う」などが挙げられる。研究発表を聞くことと参加者同士の自由な情報交換を実現することの両立を図ることは容易ではないが、これらの課題を鑑みて、運営で対応する点、実施方法を改善する点など、総合的に判断して次年度の開催を検討する必要がある。また、口頭発表の件数は過去最多であったが、ポスター発表については直近 15 年間で最も少ない件数であった。発表件数は参加者数にもつながっているため、今後はオンライン、対面のそれぞれの特徴を踏まえ、ウィズコロナ時代に合わせて、これまでの経験を活かして新しい方法を取り入れていくことも必要である。(吉田 博)

## 8. 大学院生のための社会で役立つ教育・指導スキル育成講座

### 8.1 目的・背景

大学院博士（後期）課程の学生は、修了後に大学教員となる場合や、大学教員とならない場合であっても、将来的に身につけた高度な専門知識や技術を他者へ教授する機会が生じる可能性が高い。また、大学院生としての日常においても、研究室で修士課程の学生や卒業研究生に対する指導的立場になることや、ティーチング・アシスタント（TA）やリサーチ・アシスタント（RA）として教員と共に後輩の学習指導に当たる機会もある。このような状況から、大学院設置基準が一部改正され、2019 年度より博士（後期）課程の学生に対するプレ FD の実施又は情報提供が努力義務とされた。

徳島大学全学 FD 推進プログラムでは、2020 年

度より、大学で教育に携わる博士（後期）課程の大学院生を対象にプレ FD プログラムを実施している。2022 年度は、ティーチング・ポートフォリオ・チャート（以下、TP チャート）を活用して教育活動を振り返る「日常の教育活動に関する振り返りと今後の目標設定」の実施を計画した。

### 8.2 概要

#### ■開催日時

2022 年 9 月 14 日（水）13:30-15:30

#### ■参加者数

0 名

#### ■内容

日常の教育活動を振り返り、具体的な取り組みから自身の教育に対する理念を明確にし、成果や課題、今後の目標を設定するための、TP チャートを作成する。TP チャートを作成することで、これまでの教育実践を整理することができ、これからの教育活動や将来に向けた具体的な方針や行動を明確にする。なお、同時刻に実施する、教員を対象とした TPWS と合同開催する。

### 8.3 成果と今後の課題

これまで徳島大学では、大学院生向けの FD プログラムとして、2018 年度に「TA を対象にした授業支援研修会」を実施し、2019 年度からは「すぐ使える 90 分セミナー」を大学院生を対象に加えて実施してきた。2020 年度からは、徳島大学全学 FD 推進プログラムにおいてプレ FD プログラムを実施し、2022 年度は実施 3 年目にあたる。

プレ FD プログラムの参加者数は、2020 年度は 6 名、2021 年度は 4 名と減少しており、2022 年度は 0 名となり、プログラムを開催できていない。徳島大学では、博士後期課程の大学院生が修了後に大学等の高等教育機関で教員となるケースは少なく、プレ FD プログラムとしての大学院生のニーズを十分に把握できていない。現在、四国地区大学教職員能力開発ネットワークの FD 専門部会では、プレ FD プログラムの共同開発にむけた調査研究が行われている。四国地区のコア校（愛媛大学、香川大学、高知大学、徳島大学）においても、同じような状況であると考えられることか

ら、これらの大学の担当者と協働して、本学のブレ FD プログラム開発を行うことが重要である。

(吉田 博)

#### 参考文献

- 1) 佐藤浩章・中井俊樹・小島佐恵子・城間祥子・杉谷祐美子編 (2016) 『高等教育シリーズ 171 大学の FD Q&A』玉川大学出版部, pp63-64.
- 2) 川野卓二・久保田祐歌 (2015) 「徳島大学の教学マネジメントと AP 採択事業「SIH 道場」による全学へのアクティブ・ラーニング展開の試み」『大学教育と情報』2015 年度 (3), 19-21.
- 3) 久保田祐歌・吉田博 (2016) 「学修の振り返りを促進する授業設計：アクティブ・ラーニング型初年次教育プログラムの事例から」『京都大学高等教育研究』(22), 115-118.